

て、川島町の方がずっと距離的にも  
感覚的にも身近である。これは子ど  
もたちも同じように感じているよう  
である。通りを一つ隔てると小学校  
も中学校も通学区域が異なるので、

小学校へ入学すると、川島町の子ど  
もたちのかかわり方が強くなってい  
く。我が家の息子は、剣道は、「西  
谷道友会」で西谷の方たちに、少年  
野球は「川島イーグルス」で川島の  
人たちに大変お世話になっている。

もっとよく知りたい歴史

現状については、ここに書かれて  
いることと認識は同じようなもので  
あったが、歴史についても少し詳  
しく知りたいものである。特に、横  
浜では他に例のない公民館の運営、  
連合町内会の保育園、富士山神社の  
創建など、これらの生まれた背景  
や、そこに活躍した人々の姿を、あ  
まりよく知ることができない。ここ  
では「活力がうすれてきたと危惧」  
される以前活発な活動がなされてい  
たことが推察される。現在の西谷の  
基礎作りをした人々の様子を知ら

いと強く感じた。その事実や人々の  
様子を記録して、残しておく必要が  
あるのではないだろうか。

## 二——魅力ある「まち」へ

子ども会活動を子どもたちの手に

一般的に、今の子どもたちは、同  
年齢の子どもと遊び、年齢が異なる  
とあまり遊ばないと言われるが、こ  
の地域では、子どもが少ないので、  
そんなぜい沢は言っていられず、年  
齢にかかわりなく、遊ぶ相手がある  
と喜んで遊んでいる。

確かに子ども会活動については、  
数の減少への危惧ということはある  
が、そのことよりも、子ども会の運  
営ももっと子どもたちの手にゆだね  
た方がよいのではないだろうか。今  
のように、おとなが大部分かかわっ  
ていると、参加しているという気が  
少ないのではないか。何もかもおと  
なにやってもらうことに慣れている  
今の子どもたちに、自分たちの手で  
運営するよう援助していくのは、と  
ても時間や労力がかかり、大変なこ

とは、わかるが、一たんそれが軌道  
に乗れば、大きい子が小さい子へ受  
け継ぎ、子どもたちの縦のつながり  
もでき、地域への認識も強いもの  
なるのではないか。そうなれば、一  
時的に地域から離れても、将来、地  
域の活動にもどってまた、活動して  
くれるのではないだろうか。

## 地区センターの自主事業に期待

「自主活動ができる施設ができた  
ならば、町はかわっていくと言え  
る」と述べられているが、そうだろ  
うか？ 施設が出来ただけで、自主  
活動が始まるとは思えないのであ  
る。そのためには、地区センターと  
地域住民がお互に働きかけをしてい

## 我が町・希望が丘が本になった。 嬉しくなって読みました。

——中山文字

ふと手にした「まち1986 地  
域の活力と行政」。表紙に「旭区希  
望が丘」と書いてあるではありませ  
んか。「わあ、私の町が本になっ  
た！」

今、思い返しても感動的だったと

かないとならない。そこで、地区セ  
ンターの企画に期待している。様々  
な講習や、講座を企画し、その受講  
者を中心にグループの育成が望まれ  
る。それらのグループを核に、活動  
の輪を広げていくことにより、それ  
ぞれ点や線であった人々やグループ  
がつながりを持ち、活動の輪が広  
っていくのではないだろうか。商栄  
会の事業、子ども会活動、青指や、  
体指の人たちの活躍も、もっと有効  
になってくるのである。そうなって  
はじめて、「自主活動こそ、これか  
らの地域活動のエネルギー源にな  
る」と言えよう。

△教育委員会保土ヶ谷図書館V

思えるほど嬉しくて、読み始めたの  
は、当然九十五頁の第二部横浜タウ  
ン・ウォッチング、その四「旭区希  
望が丘」の章からでした。

自分の住んでいる町のことを書か  
れていますから、どうしても読みな

が現実の町希望が丘がチラチラと頭に浮かんでいきます。「現実と比較しながら読む本なんて、そうザラにない」と思いながら、楽しく読み進めました。

例えば、最初に出てくる環境の項では、「フムフム、こんなものですね」と思いつつ、希望が丘の商店数が旭区内で最も多いとあるには驚きました。百七十店もあるなんて、生活実感をずっと上回っています。どうやらそれは、飲食店数百二店によるためのよう。というのは、希望が丘の裏通りには、住宅街であるにもかかわらず、夜の飲食店街があり、そこは住民のほとんどが利用していません。私も全く利用したことがなく、ここを差し引いたものが、希望が丘住民、私の生活実感の商店数なのです。

②歴史は軽く読み飛ばし、いよいよ核心の③自治会・町内会、④各種団体・自主活動の項へ。

「自治会・町内会と各種団体が連絡し合い、相互協力・調整をし、地域がかかえている問題や課題に組織

的に対応している」とあるのですが、はつきり言って、私の生活とは掛け離れた、知らない世界が展開しています。

この本でも、希望が丘は、「百五十二戸の農村が一大ベッドタウン」と書かれてありますが、私にとつての希望が丘は、子供の頃に転居し育ったところであるにもかかわらず、まさにそのとうりのベッドタウン。勤めを持つ身では、眠るために帰る町でしかなく、地域の活動とは全く無縁です。多くの人々がこんな積極的に活動しているなんて思いもよらなかつたし、まして、シンボルマークや希望が丘音頭、希望が丘太鼓音頭があるなんて、ビックリもいいたくありません。ベッドタウンの間関係は冷たいなんて言われませんが、希望が丘は違うのかしらと考えたしまいました。

そういうえば、サラリーマンを退職して六年になる父は、昨年、町内会の役員当番を結構楽しそうにやっていました。地域での生活がすべてになると、当然、そこでの交流が欲し

くなりますから、私も将来は希望が丘のよい活動家になるかもしれませぬ。その時、受け皿として、こんなにたくさんの方の団体やグループがあつて、活発にやっているとしたら、なんとも心強い限りです。楽しい交流がある地域生活を予測できます。

我が町「旭区希望が丘」の章を読み終えたところで、次は、残り四つの町のウォッチングを読みました。

横浜といえは、一言で、東京のベッドタウンと片づけられますが、ここに書かれた五つの町について読むと、同じベッドタウンの横浜の町でも、それぞれ特色があり差異があり興味深く思いました。(故意に違いを強調してあるのかなとちょっと疑いもしましたが……)。しかも、どの町も、人々はそれぞれのやり方で活発に活動している様子。

町は、当然のことながら、ひとりひとりの住民によって作られるものです。このウォッチングでは、虫めがねで見ると、市井の中の個人個人の活動・町とのかかわり方が記され、こうしたとらえ方が大変魅力

的です。マクロな見地からでは抜けて落ちてしまう地域の味、人々の町とのかかわり方、それを網羅し、しかも全体をまとめると人間のダイナミズムを感じさせ、人間・普通の人々も捨てたものではないと思わせる。虫めがねウォッチングの成功です。

「自分の町ってこんなところなんだ、面識のない〇〇さんだけど、身近に素敵な人がいるのね」と、町やお隣さんを再認識。タウンウォッチングを読んだら、私の体の中に、温かい活力が湧いてきた気がしました。

あえて苦言を呈すなら、本の前文「今日の横浜における地域の活力」を書かれた越智昇先生、ちょっと内容が難しかったです。ここに出てくる五つの町の住民は、我が町が本になつたとあれば、だれもが「どれどれ」と読んでみたくなるはずですが、だから、そのだれもがよくわかる、やさしい文章が欲しかったと思うのです。生意気を申して失礼いたしました……。

ハサンケイリビング新聞社横浜本部レポーターV